

# 温泉観光の再生における クリエイティブ経済と社会的共同消費手段

——石川県・山代温泉の事例——

松田 充史・小長谷 一之

## I. はじめに

本稿では、国連貿易開発会議（UNCTAD）（2014）『クリエイティブ経済』の経済社会像を元に、山代温泉の取組みを考察した。クリエイティブ経済の基礎は「クリエイティビティ（創造性）」である。創造性と4つの資本のモデルである「5Cモデル（クリエイティビティ、人的資本、社会関係資本、文化資本、制度的資本）」をフレームワークとし、クリエイティブ経済が温泉観光の再生につながる可能性と課題を整理した。さらに、クリエイティビティを有する観光資源について、社会的共同消費手段による経済発展の課題を検討した。

## II. クリエイティブ経済とクリエイティブ産業

21世紀の経済社会の主力はクリエイティブ経済に移行するといわれている（UNCTAD 2014）。その中心を担うのがクリエイティブ産業であるが、その典型的な応用分野が観光として期待されている状況を概観する。

### 1. クリエイティブ経済の定義

国連貿易開発会議（以下、UNCTAD 2014 とする）では、クリエイティブ経済を次のように定義する。

「クリエイティブ経済」は、経済的な成長と発展をもたらす見込みがあるクリエイティブ資産にもとづく、現在進行形概念である。

- ・それは、所得獲得、雇用創出、輸出収入を促進することができる。一方、社会的包摂、文化多様性、人的能力開発を進める。
- ・それは、技術、知的財産権、観光対象と相互作用するような経済的、文化的、社会的側面を内包する。
- ・それは、発展の側面に関わり、マクロレベルとミクロレベルの活動を経済全体に横断的に結びつけるような、知識にもとづく経済活動である。
- ・それは、革新的で学際的な政策対応や官庁間行動を要請するような、実現可能な発展の選択肢である。
- ・クリエイティブ経済の中心にあるのは、クリエイティブ産業である。

### 2. クリエイティブ産業の定義

つぎに、そのクリエイティブ経済の中心にあるクリエイティブ産業の定義は、同じく

UNCTAD (2014) から、

- ・製品・サービスの創造、生産、流通の循環系である。そこでは、創造性（クリエイティビティ）と知的財産をおもな投入要素として用いる。
- ・知識にもとづく一連の活動である。それは、芸術に焦点を合わせるが、芸術に限定されるわけではない。それは、取引／貿易と知的財産から収入を生み出す。
- ・有形の製品と無形の知的サービスや芸術的サービスからなるが、それらはクリエイティブ・コンテンツ、経済的価値、市場目標をもつ。
- ・職人、サービス、産業の各部門を横断して位置する。
- ・世界貿易の新たなダイナミックな部門を構成する。

### 3. 観光はクリエイティブ産業の重要な 1 部門とされるようになった

つぎに、このクリエイティブ産業の重要な 1 部門が観光産業であることをみる。

2009 年に UNESCO は、「あらゆる人間の文化活動を記録できる国際標準といえる文化統計に対する新しい枠組み」を提示した。この改訂された枠組みは、文化的サイクルにおける、1) 創作（創造）、2) 生産、3) 普及、4) 展示／招待／伝達、5) 消費／参加、の 5 つのプロセスを統合したものといわれ、この UNESCO (2009) の枠組みでの文化活動の定義は、図 1 のようになっているが、その 1 つの部門に、「観光」が含まれている。

また『クリエイティブ経済』の第 1 章 1.2.3 節は「観光（ツーリズム）」に説明があたり、以下のように述べている。・・・観光業の世界規模での成長は持続しており、観光客市場でクリエイティブな製品や文化的サービスを販売する産業の成長を加速している。グローバルにみると、観光業は 1 日 30 億ドルのビジネスであり、あらゆる発展レベルの国が、そこから潜在的に利益を得ることができる。2008 年、国際観光客数は 9 億 2200 万人に達し、観光業収入は 9440 億ドルにまで拡大した。年 4% 成長は長期に渡り続くと予想され、2020 年の国際観光客数は 160 億人に達することになる。・・・観光客は、娯乐的・文化的サービスや多様なクリエイティブ製品（工芸品や音楽など）を消費する中心人物である。国の観光客支出のより大きな割合をクリエイティブ産業が確実に占めるための連携にとっても、省庁間協調の政策が重要である。・・・文化遺産の拠点、祝祭、ミュージアム、ギャラリー、また、音楽、ダンス、劇場、オペラ実演などを鑑賞に行く需要を通じて、文化部門は観光業に貢献する。・・・文化遺産の拠点を中心とした文化的観光業は、UNESCO 世界遺産リストに選ばれることにより支援（されるなどして）・・・過去数 10 年間に、多くの国の急速な成長産業となってきた。そのリストには、傑出した普遍的価値をもつと世界遺産委員会が認めた文化的・自然的遺産として、現在 890 の遺産が登録されている。それは文化遺産 689、自然遺産 176、混合型遺産 25 であり、141 カ国におよぶ。2010 年 6 月までに、187 の関係国は「世界遺産条約」を批准してきた。・・・(UNCTAD 2014)

上記のようにクリエイティブ経済の定義に「観光対象と相互作用するような経済的、文化的、社会的側面を内包する」とある。また UNCTAD (2014) の上記の指摘で、「観光客は、娯乐的・文化的サービスや多様なクリエイティブな製品（工芸品や音楽など）を消費する中心人物である」とし、「観光客市場でクリエイティブな製品や文化的サービスを販売する産業の成長を加速している」とクリエイティブ産業と観光の関わりを指摘している。

また、UNCTAD (2014) は、エコツーリズムに関連し、温泉観光に絶大な期待をよせてい

る。第2章2.4節の「B. エコツーリズム」項によれば、以下のように述べられている。・・・  
 ・クリエイティブ経済と観光部門との産業間結合をさらに強める必要がある。・・・2006年  
 の「国際エコツーリズム協会 (International Ecotourism Society)」の報告では、エコツーリ  
 ズムおよび自然観光は世界で年率10-20%の増加であり、その増加率は観光産業全体のそれ  
 の3倍である。エコツーリズムは自然保護を促進し、地元の人々の積極的な社会経済的参加  
 を準備する。開発手段としては、エコツーリズムは生物多様性条約の以下のような3つの基  
 本的目標を進める。①生物および文化の多様性の保護、②多様性の持続的利用の促進、③利益  
 を地元社会と土地の人々と公平に共有すること。・・・エコ温泉はエコツーリズムの多くの利  
 点の最良の事例である。モロッコ、チュニジアだけでなくインド、スリランカ、タイ、ベトナ  
 ムのような途上国では、年来、医学、保健、健康食の分野における伝統的な知識にもとづい  
 て、温泉業における優れた専門的知識を発展させてきた。とくに温泉業界と地元料理を結びつ  
 けることに政策的関心が寄せられた。2009年の「国際温泉協会」の報告では、2008年に温泉  
 業界は18%の成長で128億ドルの売り上げ規模であった。・・・エコ温泉には、本来的に自  
 然の保健美容品が備わっている。これらの伝統的な知識基盤産業は、持続的開発と生物多様性  
 の維持という目標を遂行する政府を支える格好の位置にある。インド輸出入銀行の報告によ  
 れば、医薬品、保健サプリメント、ハーブ美容・化粧品を含むハーブ製品のグローバル市場は推  
 計で620億ドルに達する。・・・いくつかの企業は、コミュニティ、大学、政府、ならびに  
 NGOと組んで天然原料の持続的な収穫と有機栽培の確保に取り組んでいる。公正価格、長期  
 契約、教育や環境や社会面でのサポートは、ビジネスの提携を成功裏に導く。・・・(UNC-

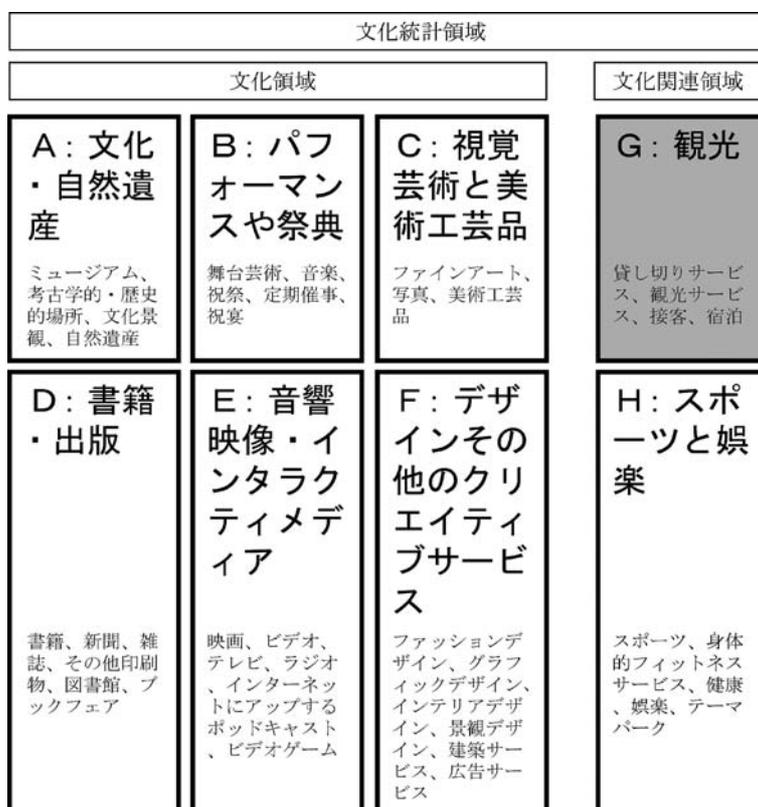


図1 ユネスコ(2009)の「文化統計領域」、出典 UNESCO(2009)

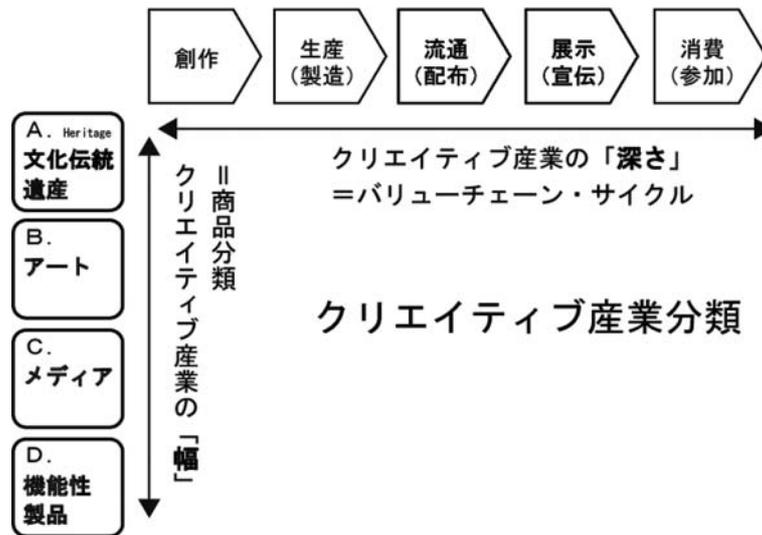


図2 クリエイティブ産業の分類法、出典 UNCTAD (2014) の訳者小長谷によるまとめコメント

TAD 2014)

このように、21世紀の経済社会の主力となるとされるクリエイティブ経済の中心を担うのがクリエイティブ産業であるが、観光はそのクリエイティブ産業の重要な1部門とされるようになった。そしてクリエイティブ経済のエコの観点からも、中でも温泉観光が注目されている。

そこで、本稿では、事例から、クリエイティブ経済が、我が国において温泉観光の再生につながる可能性について検討し、その課題は何かを明らかにすることを目的とする。

### Ⅲ. 山代温泉の地域再生の概要

#### 1. 前史

山代温泉(石川県加賀市)は、北緯36度17分0秒、東経136度21分10秒、面積23平方キロメートル、加賀市の南東部、JR加賀温泉駅から約2キロメートルの山側に位置する。旧山代温泉地域は人口6万5581人、2万2552世帯(2005年)。財産区制で1区から25区あり、実質35の区に分かれている。

山代温泉の歴史は古く、温泉は古代から自然湧出していたが、今から1300年以上前の725年に、僧行基が霊峰白山登山へ修行に向かう途中、傷口を癒す鳥を見つけその効能を発見して温泉を開いたと伝えられる。江戸時代、大聖寺藩の湯治場として栄え、北前船の船乗りたちが、疲れを癒しに山代温泉でひと時の時間を過ごしたとされる。当時、旅館は源泉の周りに数軒あった程度だった。

明治・大正になってから旅館が徐々に増え、立ち並んだ。当時も旅館に内湯はあったが浴槽は小さく、温泉は源泉で汲んで馬車などで運んだという。その後、「湯の曲輪(がわ)」と言われるエリアにある源泉から、松の木をくり貫いたパイプで出すようになった。

与謝野晶子は、山代温泉について、「山代のいで湯に遊ぶ楽しさはたとえて言えば古九谷の青」と詠んだ。泉鏡花は「夢もおぼろな山代温泉」と記した。また希代の粹人であった北大路

魯山人も、この地を気に入って「S屋」（現在はHリゾートが経営している）や、「T旅館」（現在は「T亭」といった旅館の部屋を毎晩サロンのように使い、文人が多く訪れ栄えた時代があった。

昭和20年代はまだ小規模旅館が軒を連ねる程度であったが、昭和40年代の高度経済成長期に現在の大規模旅館が立ち並ぶようになった。その時期は、広告表現に使っていた「湯女の深なさけ」「遊ばせ上手の山代温泉」などからわかる様に、山代温泉は「典型的な男性客向けの歓楽型温泉地」として、遊興が山代温泉の発展を支えた。

高度経済成長期に急速に入込客数が伸びた。1991年には宿泊客数が168万人とピークを迎える。しかし、1992年にバブルが崩壊する。そこへ、更に1995年に阪神淡路大震災が起こった。当時、関西が主要なマーケットであった山代温泉への入込客数は激減した。その上、1997年にロシアタンカー油流出事故災害が起き、日本海の魚が食べられないとの風評被害にあい、更に入込客数が落ち込んだ。2010年の宿泊人員は85万1343名となり、ピーク時の約半分と激減した。

## 2. 山代温泉の取組み

1994年、山代温泉は「長期ビジョン策定委員会」をスタートさせた。委員長は当時、旅館S屋社長のM氏がつく。S屋は江戸時代から380年続く宿で、本館は文化庁登録有形文化財に指定されている。しかし経営破綻し、2005年からHリゾートにより再建されている。当時の「山代温泉観光協会」の会長はホテルH社長YH氏が務め、副会長はY氏と共に商工振興会長が就いていた。また、「山代温泉旅館協同組合（1956年設立）」は理事長に旅館BのYY氏が就いていた。

皮肉なことに、当時要職につき、山代温泉の為に尽くした人々の経営するS屋、ホテルH、旅館Bはいずれも後に再生旅館となる。細谷（2003）も「・・・案外無視できないのが『代表者の対外役職』である。旅館によっては、旅館組合・観光協会の役員にはじまり、エージェントの地区役員、商工会・商工会議所、さらには地元消防団長などと実にさまざまな役職を務めている場合もある」と本業にひびくような可能性を指摘している。

## 3. 委員会による議論

このように、山代温泉では1990年代に、「山代温泉長期ビジョン策定委員会」や「山代八景整備検討委員会」が設置され、山代温泉の将来や地域全体を文化的経済的に発展させていくための協議が始まった。その中、旅館経営者の中では若手であった旅館R社長のY氏が「開湯1300年祭実行委員長」に就く。委員会では、Y氏が実行委員長を務める「開湯1300年祭」が将来の山代温泉を方向づける総合的な提案であると位置づけ、1993年を宣言年として議論が始まった。

2001年頃、関係者は、当時の加賀市長であったO氏の人脈で、木造建築の町再生に定評があった建築家N氏の下へ相談に行った。予算が無いにも関わらず、N氏は山代温泉の整備についての取り組みを引き受けた。最初に町塾を開講した。商店街、区民、旅館などをグループに分けてワークショップを行った。その内容を報告書にまとめ、地域住民は山代温泉をどういう町にしたいのかと方向付けを行い、次の展開へと進んだ。ワークショップは3つの検討委員会に分けられた。「総湯検討会」、「道すじ検討会」、「賑わい（ソフト・イベント）検討会」

である。そこでの議論から市民の理解、議会の了承を経て整備事業が始まった。

#### 4. 総湯を中心としたまちづくり

##### ①総湯

山代温泉のまちづくり整備事業は、共同浴場である「総湯（そうゆ）」を中心としたまちの再生である。

昔の温泉旅館は、宿泊機能だけで、入浴は共同浴場を利用した。そのため、共同浴場を中心として温泉地が発展していった。ということは、もともと温泉は「泊浴分離」だったと言える。そのため、共同浴場を中心として温泉地が発展していった。その源泉のある共同浴場は「外湯」、「大湯」、「総湯」、「惣湯」、「ゆざや」などと地域により様々な呼び方がある。

かつての山代温泉の総湯については、山代温泉観光協会（1996）によると「今江組巨細掌記」（江戸時代中期、能美郡今江組の役人の大町氏の記録）に「一ヶ所惣湯 2 間半、桁間 4 間」とある。また、「山代記（1778 年武田友海著）」には「上湯と下湯の 2 槽あり。昔は瓦葺であったが、明治 4 年（1767 年）に柿葺（こけらぶき）屋根にした。」と記録されている。また、入浴の様子は「外でたたえるいで湯に里人多く集まり、手足などを洗って、おもひなげにさざめきわたり、あるいは馬などの泥まみれたるを洗い、こと里にかわりて賑わいおぼえ・・・」とされており、当時から総湯は地域住民に親しまれていたことがわかる。

その後、各旅館に温泉が内生化され、マストურიズムが成立する。

最近の各温泉のまちづくりは、共同消費手段としての共同浴場を再生し、かつてのまちをもう一度再現しようという流れといえる。

山代温泉は、2009 年 8 月に「総湯」を新しく立て替える。これは、地域住民の為の共同浴場としての施設である。

一方、総湯のすぐ北隣に「古総湯」と称した施設を 2010 年 10 月に開業した。「古総湯」は、柿葺の屋根など明治 19 年築のものを忠実に復元している。木造 2 階建て建築面積 204.36 m<sup>2</sup>、延床面積 281.47 m<sup>2</sup> の建物である。明治時代の総湯を復元し、ステンドグラスや壁・床の九谷焼のタイルなども忠実に再現した外観や内装の施設である。浴室も拭き漆の壁面で木地の木目の美しさと深い艶を出している。当時の先端であったステンドグラスで明治時代の珍しい粋を感じさせる工夫や、床の浴室タイルも地元作家が一枚一枚手描による染付けの技法で当時の絵柄や様式の九谷焼を再現している。浴槽は小松の滝ヶ原の石を使用し、源泉かけ流しのお湯で、山代温泉の歴史や文化を体験できる施設としている。この施設は、外観だけでなく、入浴方法も当時の雰囲気のままにして、温泉の歴史や文化を体験する山代温泉シンボルとして、山代温泉再生のために温泉街のにぎわい創出を図っているのである。

このように、「総湯」「古総湯」と合わせて二つの施設を中心とした町並みを整備し、総湯を中心とした周囲の街並みを北陸特有の呼び方で「湯の曲輪（がわ）」と言っていた日本の温泉文化、温泉地の原風景を今に伝えようとする取り組みを行なっている。

事業費 13 億 8000 万円で、その内訳は、「総湯」が整備費 7 億 2700 万円、「古総湯」が整備費 3 億 3000 万円、「湯の曲輪」の道路整備費 3 億 2300 万円であった。その財源の内訳は、国から 11 億 3700 万円（まちづくり交付金 5 億 5200 万円、合併特例債にかかる地方交付税分 5 億 8500 万円）。寄付金 9500 万円（財産区 6000 万円、観光協会・旅館協同組合 3500 万円）。そして、加賀市から 2 億 8700 万円であった。



写真1 古総湯



写真2 総湯



写真3 古総湯と総湯（湯の曲輪）



写真4 はづちを楽堂

だが、まちづくりの試みは決して平坦なものではなかった。山代温泉観光協会のA事務局長によれば、「2006年頃までは、総湯及び古総湯と2つ建てることどころか、どこに建てるかも決まっていなかった。市民は駐車場を併設出来る敷地での建設を望んでいた。その議論の最中、源泉すぐにある老舗旅館Y旅館が閉館した。そこで、その跡地に地域住民の為の総湯を建て、元総湯があった場所に明治時代の施設を再現した古総湯を建てることになった。そうして、総湯・古総湯の建設事業が始まった」という。

#### ②はづちを楽堂

総湯のすぐ北に位置する「はづちを楽堂」は、建築家N氏が、地元の建築士とともに、敷地内に配置する三棟のべんがら風木造平屋建て建物を設計したものである。路地裏を歩くような回遊性をもたせている。ここは観光第一ではなく地域住民の豊かさも考えるというコンセプトで、地域のコミュニティ活動の拠点としてオープンした。観光地が強い観光ブランドとして育つためには、そこに住む人たちの生き生きとした生活が必要であるという考えの下にある。「はづちを」という名称は、服部神社の機織りの神様、天羽槌雄神（あめのはづちをのかみ）に由来し、山代田楽をプロデュースした故野村万之丞氏が命名した。

#### IV. 山代温泉の再生戦略を5Cモデルにより分類

以上から、観光とくに温泉観光はクリエイティブ経済の1つなのだから、創造性と4つの

資本のモデルである「5Cモデル（クリエイティビティ、人的資本、社会関係資本、文化資本、制度的資本）」によって分析できるはずである。

そこで、山代温泉におけるクリエイティブ資本を、「総湯」「古総湯」および「はづちを楽堂」として、それらに関わる人的資本、社会関係資本と制度的資本を整理してみる。

### 1. クリエイティブ資本

「総湯」「古総湯」のケースから、クリエイティブ資本の成立として考えられるものには以下の点がある。①忠実に再現された歴史、②地域の伝統工芸の使用、③地元作家による作品、④天然物の使用、⑤温泉（源泉かけ流しのお湯）、⑥入浴方法、といった山代温泉の歴史や文化を体験できる点である。特にこの施設は、外観だけでなく入浴方法も当時の雰囲気のままにしている点から、経験といった形のないものもクリエイティブ資本であることが言える。

また、「はづちを楽堂」については、⑦路地裏を歩くような回遊性、⑧アートのコンセプト、⑨地域住民の生活文化、⑩ネーミング、などの点が考えられる。

表1 山代温泉にみられるクリエイティブ資本分類

古総湯（総湯）	①忠実に再現された歴史、②地域の伝統工芸の使用、③地元作家による作品、④天然物の使用、⑤温泉（源泉かけ流しのお湯）、⑥使用（入浴）方法。
はづちを楽堂	⑦回遊性、⑧アートのコンセプト、⑨地域住民の生活文化、⑩ネーミング。

### 2. 人的資本

人的資本としては、キーパーソンとして活躍した、旅館 S 屋社長 M 氏、ホテル H 社長 YH 氏、旅館 R 社長 Y 氏、建築家 N 氏があげられる。

旅館 S 屋社長の M 氏は、1994 年山代温泉長期ビジョン策定委員会の委員長を務めた。S 屋は江戸時代から 380 年続く宿で、本館は文化庁登録有形文化財に指定されている。魯山人も滞在した宿であるが、経営破綻し、2005 年に H リゾートにより買収され再建されている。

ホテル H 社長 YH 氏は、同時期山代温泉観光協会会長を務めていた。ホテル H は 1907 年創業の老舗旅館である。2 万坪の敷地面積と全 179 室の客室を有する山代温泉ばかりか日本を代表する温泉旅館として名をはせた。1983 年には昭和天皇が全国植樹祭でご宿泊され絶頂期を迎えていたが、経営不振により 2012 年より休業している。

旅館 R 社長 Y 氏は、当時の旅館経営者の中では若手であったが、「開湯 1300 年祭実行委員長」に就く。2010 年に、観光庁より、「団体遊典型観光で全国に名を馳せた」温泉観光地から、「個人・時間消費型観光」に対応した地域づくりを図るため、旅館施設の一部開放事業の推進、空き旅館・空き店舗対策事業を同氏自ら率先して着手したとして、Y 氏は観光カリスマに選ばれた。

建築家 N 氏は、木造建築の町再生に定評があった。N 氏は山代温泉の整備を引き受け、町塾を開講した。商店街、区民、旅館などをグループに分けてワークショップを行い報告書にまとめ整備事業が始めた。

### 3. 社会関係資本

社会関係資本とは、人間同士の信頼のネットワークであり、まちづくりのプロセスの中で有

効に機能した各種団体があげられる（塩沢・小長谷編 2007、2008、2009）。

ここでは、山代温泉観光協会、山代温泉旅館協同組合、長期ビジョン策定委員会、山代八景整備検討委員会、開湯 1300 年祭実行委員会などの組織が山代温泉の再生に関わった。また、N 氏が開講した町塾で商店街、区民、旅館などをグループに分けて行ったワークショップでの 3 つの検討会（総湯検討会、道すじ検討会、賑わい（ソフト・イベント）検討会）がある。

表 2 山代温泉を 5C モデルで分類

クリエイティビティの対象	人的資本
総湯 古総湯 はづちを楽堂	旅館 S 屋社長 M 氏 ホテル H 社長 YH 氏 旅館 R 社長 Y 氏 建築家 N 氏
社会関係資本	制度的資本
山代温泉観光協会 山代温泉旅館協同組合 長期ビジョン策定委員会 山代八景整備検討委員会 開湯 1300 年祭実行委員会 ワークショップによる 3 つの検討会・総湯検討会 ・道すじ検討会 ・賑わい（ソフト・イベント）検討会	まちづくり交付金 地方交付税 寄付金

#### 4. 制度的資本

まちづくり交付金、地方交付税、寄付金などの制度により事業費が出された。

#### V. 社会的共同消費手段

古総湯は観光客、総湯は第一義的には、地域住民のために作られた。

はづちを楽堂は、地域住民の豊かさを第一に考えるというコンセプトで、地域のコミュニティ活動の拠点として作られた。

筆者らがヒアリングした旅館 B の社長によると、古総湯と総湯を作る際にどのようなものを作るかについて行政から相談があったが、その意見が反映されなかったと語る。「観光客用の古総湯を作ったが、地域住民からの反対があった。地元の共同浴場では、観光客と日常的に利用する地域住民との間に洗い場を譲るとか譲らないといった問題が懸念されたので、分けて良かったかも知れない。観光客に対して寛容では無いとも言えるかも知れない。観光客が地域にお金を落として町作りに繋がるとは考えていない。」と言う。地域経済が観光に大きく関わっていても、旅館 B の社長が指摘するように、「地域住民は温泉旅館だけしか利益を受けていないと考えている」という見方がある。温泉で経済的利益を得ているのは温泉旅館という地域の一部だけで、「旅館が繁栄すれば、入湯税などの税金が地域経済を発展させる」と考える旅館側との意識の差がある。

社会的共同消費手段は、社会的所有あるいは公有化される（宮本 1982 ほか）。地域住民にとって、温泉地のクリエイティビティを有する観光資源は、観光客とは違った価値をもってい

る。その為、共同湯では、地域住民をも顧客として考えられることになる。

しかし、経済発展をめざすためには、マネジメントが重要であり、マネジメントには「顧客は誰か（ドラッカー（1996）」の視点が必要なのである。ここでは、古総湯は観光客が顧客であり、総湯とはづちを楽堂は地域住民を顧客としている。だが、それは外部からの観光客のものにもなりつつある。課題はこれからである。

## VI. 温泉旅館

### 1. クリエイティブ産業を創造するためには

「クリエイティブ経済の範囲はクリエイティブ産業の大きさにより決定される」とされるように、クリエイティブ経済では、クリエイティブな製品・サービスが求められる。「文化と産業は相反するもの」という考え方では温泉地でのクリエイティブ経済は成立しない。

山代温泉のケースでは、「総湯」「古総湯」および「はづちを楽堂」をクリエイティブ性の対象として整理すると、誰のためのものかという課題が浮かび上がった。クリエイティブ産業がクリエイティブ性を源泉とする経済活動として成立するためには、ドラッカーのいう「顧客は誰か」の観点が欠かせない。

そこで、筆者らは「総湯」「古総湯」および「はづちを楽堂」と温泉旅館、地域住民との関係から、クリエイティブ産業としての温泉観光を検討する必要があると考える。

### 2. 温泉旅館の役割

2008年に発表された日本政府観光局（JNTO）の『訪日動機（観光目的）の市場間比較』によると、訪日動機（観光目的）として「温泉」を挙げている国は、韓国では日本食の2位ショッピングの3位を押さえ1位、中国・台湾ではショッピングに次いで2位、香港ではショッピングと日本食に次いで3位、オーストラリアで4位、タイ・シンガポール・マレーシアで5位を占め、全体でも、「温泉」は、ショッピング、日本食に続き3位と人気が高い。かつて筆者らがヒアリングした中国国家観光局大阪事務所のO氏が「温泉は日本文化」とのべていたほど（筆者ヒアリングによる）、温泉地は、外国人観光客からも人気のある観光地となっている。また、観光庁の『観光地の魅力向上に向けた評価手法調査事業報告書2010』によると、「温泉系は、『宿泊施設（おもてなし、食事、共用施設）』で高い評価（期待度）を得ている」とされる。温泉地は外国人観光客からも人気があり、特に温泉旅館が期待されている。

### 3. クリエイティブ・クラスター

小長谷は『クリエイティブ経済（2014）』への付記の中で、クリエイティブ産業は「都市的集積が有利な都市型産業といえ、地域政策（空間的側面）が重要となる」と指摘した。一般論として、温泉地のまちなみは、多数の温泉旅館をはじめとした産業により生み出される集積の利益で、長期の歴史と文化の中で作り上げられてきたものであるといえる。地元の貴重な資源であり、経済価値ははかりしれない。故に温泉旅館が集積した温泉地では、地域政策が重要である。そこで、クリエイティブ経済のフレームワークから検討すると、温泉旅館をクリエイティブな資源として活かし、空間的側面を検討することが重要と言えよう。

## VII. 結語—温泉旅館の可能性

かつて、山代温泉は、高度経済成長からバブル期にかけて社員旅行などの法人需要などのマス・ツーリズムで右肩上がりの成長をとげた。温泉旅館は集客装置として大規模化され、旅館の中にカラオケラウンジや小料理屋などを作り、顧客の囲い込みがなされた。その時に、温泉旅館は周辺地域とは離れた存在となり、マスツーリズムの象徴となった。

だが、今日では温泉旅館への期待が変わった。顧客は個人客に変わった（ニューツーリズム革命、小長谷ほか 2012）。そこで山代温泉は、「総湯」「古総湯」と合わせて二つの施設を中心とした町並みを整備し、日本経済新聞社（2010年12月4日付）の「そぞろ歩きが楽しい温泉街」の第10位に山代温泉が選ばれるなどの成果も現れつつある。これは、共同消費手段であるので、地域住民も顧客となった。顧客は、町並みを楽しみ、町で消費をする交流人口である。観光は、地域にとっての貴重な経済成長の源であり、雇用創出の機会なのである。

本稿では、山代温泉をケースにクリエイティブ経済のフレームワークで整理を試みた。創造性の指標である「5C（クリエイティビティ、人的資本、社会関係資本、文化資本、制度的資本）モデル」を検討したところ、温泉地でのクリエイティブ経済の成立可能性を発見した。

さらに、クリエイティブ・クラスターの観点から、温泉旅館の集積地の重要性を再認識し、クリエイティブな資源としての旅館の重要性を指摘した。

温泉旅館は日本文化を全て体験できる施設として訪日外国人旅行者から人気がある。和式建築の中で、着物を着た接待係りに案内され、畳の部屋で浴衣を着、お茶を振舞われる。そして、温泉風呂に入り、和会席料理を嗜み、布団で眠る。外国人に評価されるまでもなく、日本文化の集大成である。その日本文化である温泉旅館が集積していることを再評価すべきである。

温泉旅館自体を潜在的クリエイティブ資産からクリエイティブ産業の中心として発展させるビジョンが必要である。そこで、クリエイティブ経済の視点による温泉観光再生は、クリエイティブ産業としての温泉旅館の戦略の検討にあると提言したい。

### 【参考文献】

- 石川県観光交流局交流政策課（2010）「統計からみた石川県の観光（平成22年）」。  
 石川県観光連盟（2012）「石川の温泉」資料。  
 加賀日和株式会社（2007）『加賀日和』vol.3、2007年7月10日発刊。  
 加賀日和株式会社（2008）『加賀日和』vol.13、2008年8月25日発刊。  
 小長谷一之ほか（2012）『地域活性化戦略』晃洋書房。  
 国連貿易開発会議（UNCTAD）著、創造都市研究科監修、明石芳彦・中本悟・小長谷一之・久末弥生 訳（2014）『クリエイティブ経済』ナカニシヤ出版。  
 塩沢由典・小長谷一之編（2007）『創造都市への戦略』晃洋書房。  
 塩沢由典・小長谷一之編（2008）『まちづくりと創造都市』晃洋書房。  
 塩沢由典・小長谷一之編（2009）『まちづくりと創造都市2』晃洋書房。  
 総務省（2005）平成17年度『国勢調査結果』。  
 観光庁（2010）平成22年度『観光白書』。  
 山代温泉観光協会（1996）『やましろ町事典』。  
 山代温泉観光協会（1998年3月23日最終報告）『湯の街再構築のための山代温泉景観整備計画'98』。

- 宮本憲一（1982）『社会資本論』有斐閣。
- B. J, パイン II、J. H, ギルモア（2000）『経験経済』流通科学大学出版。
- P. F, ドラッカー（1996）『新訳 現代の経営』ダイヤモンド社。
- UNESCO（2009）”2009 UNESCO Framework for Cultural Statistics”, UNESCO Institute for Statistics, Montreal, Canada.
- Richard Florida（2004）”Cities and the Creative Class” Routledge,（都市とクリエイティブクラス、邦訳は小長谷一之訳（2010）『クリエイティブ都市経済論』日本評論社）。